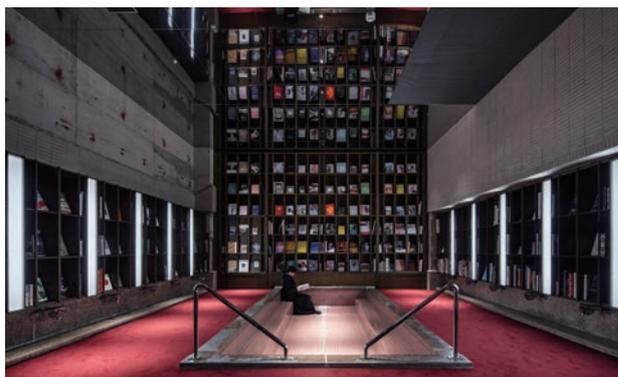




## 長野県松本市浅間温泉「松本十帖」 2022年7月23日 グランドオープン。

「松本十帖」は、貞享3（1686年）創業の歴史を持つ老舗旅館「小柳」の再生とそれを中心としたエリアリノベーションプロジェクトで誕生した複合施設の総称です。



撮影：岩佐十良 / 長谷川健太

株式会社自遊人が運営する松本市浅間温泉の「松本十帖」が、2022年7月グランドオープンします。2020年7月に一部施設から順次プレオープンしながらも、コロナ禍のなかグランドオープンできないまま約2年。コロナ収束まであたためてきた、自家醸造のハードサイダー（シードル）のリリースを契機に、2つのホテル、2つのレストラン、カフェ、本屋、ショップ&ベーカリー、醸造所の複合体が本格始動します。

創業336年、老舗旅館「小柳」のリノベーションからはじまった松本十帖のプロジェクトは、浅間温泉の「エリアリノベーション」を目指しています。ホテルの外にレセプションやカフェを作ったのは、利用者にまち歩きを楽しんでほしいから。人の流れが変わることで、この地域から新たな取り組みが生まれるきっかけになればと願っています。昨年は町内に移住したご夫婦がベーカリーをオープンし、今年は「手紙社」が運営するショップ&カフェがオープン予定。温泉街が、少しずつ、変わりはじめています。

7月23日・24日は、通常は宿泊者しか利用できないキッズスペースの一般開放や、ハードサイダーの試飲会、ALPS BAKERYのパンの試食など、地域内外の皆様に松本十帖を体験していただくイベントを予定しています。

GRAND OPENING SPECIAL EVENTS / 7月23日(土)・24日(日) 12:00 - 17:00

- ・まちびらき福引き大会
- ・浅間温泉スタンプラリー
- ・自家製ハードサイダー試飲会
- ・ALPS TABLE 内覧会&キッズスペース開放
- ・ALPS BAKERY パンまつり ほか

※当日はご予約無しでブックストア松本本箱をご利用いただけます（12～17時）。

[取材並びに本件に関するお問い合わせ]

株式会社自遊人 小沼 百合香・吉澤 早苗 info@matsumotojujo.com TEL: 0570-001-810

## [事業概要]

近年、各地で行われてきた旅館再生は、破綻した旅館を簿価よりも大幅に安く取得し、大規模な修繕や改修を行わずに営業する事業モデルが大半でした。簿価と取得額の差分が低い販売価格を可能にしたため、高い稼働率と高収益を実現しました。金融機関もそのような再生事業に新規融資を行ってきたわけですが、こういった事業は既存建物の残存価値、つまり余命を消費しているわけで、将来的な再投資が困難であることも否定できません。さらに“割安”な宿が市場に定着することで既存の宿の収益をさらに圧迫、連鎖的に破綻していく例も各地で見られました。旅館再生は「地域に廃屋・廃ホテルを作らないこと」を目的とし、それが「地域活性につながる」と考えられてきたのですが、残念ながらそうならなかったケースも全国では散見されます。

「小柳」は浅間温泉を代表する老舗であり、湯坂と山の手通りの交差点に建つ、浅間温泉のシンボルともいえる旅館でした。しかし経営者が高齢で後継者も不在。さらに平成3年と7年に新築した2棟のホテルが過大債務となっている状態でした。この旅館が廃屋となれば、地域の衰退は火を見るより明らか。そのような状況下、浅間温泉活性化に向けて、長野県の第一地銀である八十二銀行が選んだのが当社（株式会社自遊人）でした。

当社（株式会社自遊人）は新潟県南魚沼市で「里山十帖」を営むほか、各地の地域活性プロジェクトに取り組んでいますが、その手法は一般的な旅館再生手法と大きく異なり、地域の付加価値を見出し、その価値創造に積極投資していく点にあります。運営会社の収益だけでなく地域全体への経済波及効果を考えるエリアリノベーションに実績があります。今回、株式会社自遊人では株式会社小柳を完全子会社として存続させるだけでなく、クリエイターと協働して多様性を生み出すことで、観光面からも経済面からも注目される施設になることを目指しています。

株式会社自遊人／株式会社 小柳  
代表取締役 岩佐十良

## [施設概要]

名称：松本十帖（松本本箱、小柳、ダイニング、カフェ、ショップ等の総称）

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1 ほか

建築主・経営：株式会社小柳（株式会社自遊人の100%子会社）

プレオープン：2020年7月以降随時

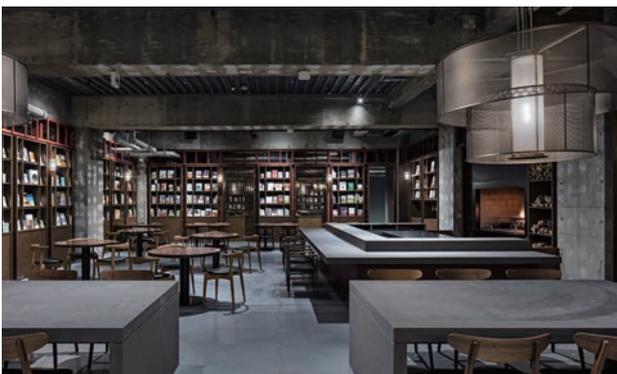
グランドオープン：2022年7月23日

ホテル客室数：松本本箱 24室、小柳 14室

料金：松本本箱 26,752円～、小柳 23,888円～（2名利用時の1名あたり1泊2食料金）

電話番号：0570 - 001 - 810（12:00～17:00）

HP：matsumotojujo.com



撮影：長谷川健太

## [事業の目的]

### 「地域の核」となる複合施設を作る。

「街の歴史と旅館の歴史を紡いで欲しい」。初めて「小柳」再生の打診を受けたのは2016年7月のことでした。ロビーと宴会場のある中央棟こそ昭和30年代築でしたが、2つの客室棟と浴場棟は平成3年と7年築というまだ築浅の状態。ロビーも平成3年にリノベーションされており、そのままでも十分営業できる状態を有していました。というよりも再生案件としてはかなり優良な状態。一般的な再生手法であれば「そのまま使用する」のが当然でした。

しかし当社では中央棟を解体撤去し、2つの客室棟と浴室棟をスケルトン状態に戻してからフルリノベーションすることを決断しました。単に簿価と取得額の差分で商売をするのではなく、新たな価値と命を吹き込み、地域の未来を担うプロジェクトにすることを決意したのです。

小柳は記録に残っているだけでも336年(2022年現在)の歴史があります。経営していたのは代々、地域の責任ある役職を担ってきた家系であり、また時には寄り合いの場であったり、下級武士に「小柳之湯」を開放するなど、「地域の核」として重要な役割を担ってきました。歴史を紡ぐという私たちの役目は、この小柳の「地域の核」としての役割を再定義し、今後さらに100年、200年と続けられるような事業を行うことにあります。



解体前の中央棟の様子



中央棟解体後

### 地力を再認識・再定義し、地域に開くホテルとする。

「地域の核」として私たちがまず着目したのは「浅間温泉の地力」を見直すこと。そして「開かれた施設」にすること。浅間温泉は日本書紀にも登場する、開湯1300年以上の歴史ある温泉地です。さらに、小柳の敷地からも見える5世紀の古墳からは王冠や勾玉が出土していたり、信濃の大小名が集まる国府的なものがあったりと、不思議な土地の魅力＝地力を持った温泉地です。実際に開湯から平成まで、この地には常に人が集まり、賑わってきました。

しかし昭和から平成の時代にかけて、旅館の大型化とともに館内に温泉街の機能を集約することで（内湯や食堂を館内に取り込むことから始まり、最終的にはラーメン屋や居酒屋、マッサージ店などの全てを館内に設置した）、旅館としての売上は増大しても地域の魅力を失っていく結果となりました。

浅間温泉最大規模であった小柳も同様で、本プロジェクトでは、そのような「閉じた温泉旅館」を「開かれた施設」にすることを重要な目標に掲げています。

## 民間主体の活性化事業としてのロールモデルを。

浅間温泉のような地力がありながら、活気を失いつつある地域は全国に点在しています。昨今、日本各地で地域活性化事業が行われていますが、そのほとんどが行政主体。本来、民間主導型が望ましいとはいえ、ビジネスとして成り立ちにくい場所で補助金等もない状態で民間企業がビジネスを立ち上げるにはリスクが大きすぎます。しかし一方で行政主体の計画は、責任の所在が曖昧になりがちで、持続可能なビジネスとして成り立ちにくい現実があります。そんななか当社では民間企業として事業計画を綿密にたて、全てのリスクを負う形で小柳（松本十帖）への投資を行っています。

他には例のない、補助金に頼らない地域活性化計画。しかも小資本の民間企業による企画運営。各方面から「事業の採算性は？」との質問をいただきますが、浅間温泉は不思議な地力のある土地。文化都市である松本の一部であり、周辺には上高地、白馬、飛騨高山、美ヶ原、黒部立山などの資源を有しています。里山十帖での経験を鑑みれば、十分に投資を回収できると考えています。

コロナ禍で計画は出鼻を挫かれた状況ですが、私たちはコロナに負けてはいられません。かつて不可能と言われた「里山十帖」に多くのお客様が集まり、全国に体験型ホテル・旅館「ライフスタイルホテル」が建設されたように、松本十帖が新たな地域活性化のロールモデルになる可能性があるのです。

浅間温泉のある松本市は人口24万を抱える中堅都市。東京のような1000万都市とは異なる方向で、「何万人が幸せになれる都市を都市を創ろう」というようなロールモデルを。私たちは、本事業が新しい経済指標と生活水準の指標を創るきっかけになることを目指しています。

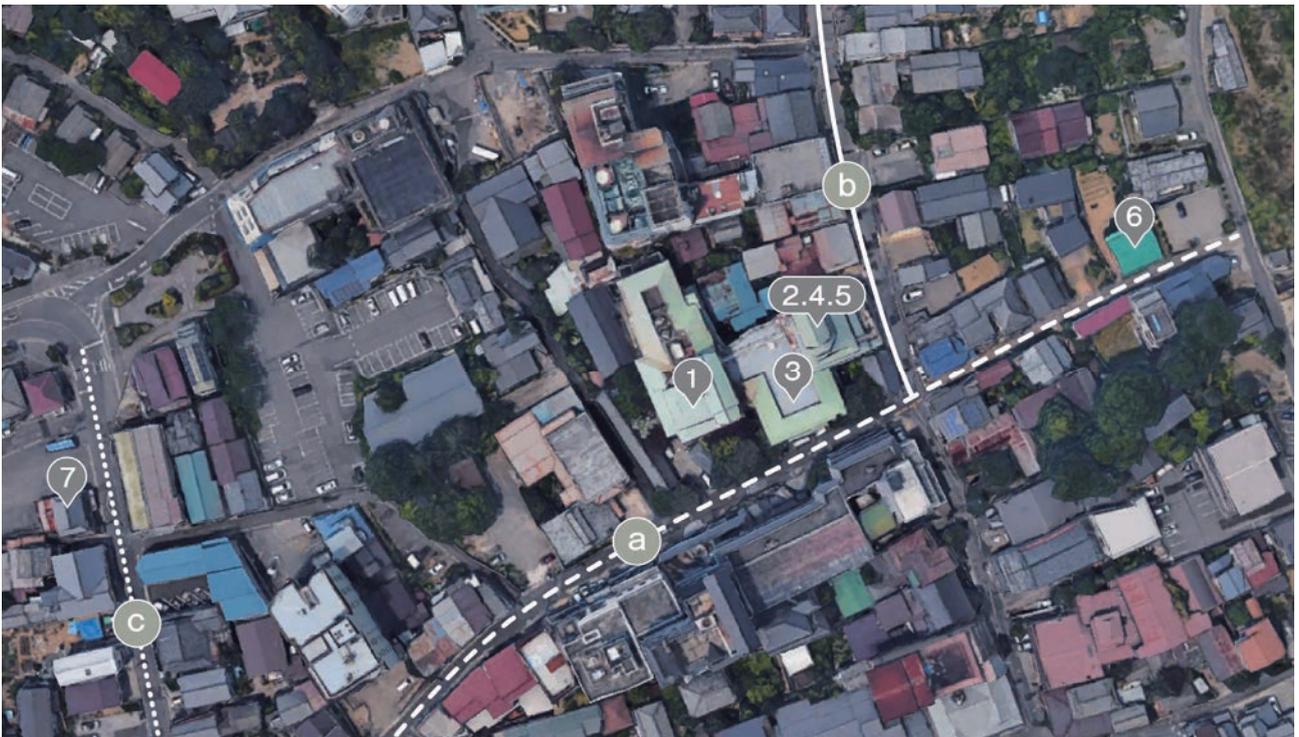


撮影：岩佐十良 / 長谷川健太

## [全体計画]

### まちづくりのランドデザイン

- ・リノベーション前の「小柳」は、東棟 - 中央棟 - 西棟と3つの建物が連なっていましたが、昭和初期の写真を見ると中央棟は存在せず、その部分は庭で正面入り口であったことがわかりました。さらに江戸時代にはこの場所に下級武士の湯「小柳之湯」があったことが推測されることから中央棟を解体、東西の棟を分けました。東西をつなぐ外通路は車椅子も通行可能なスロープを設けた回遊庭とし、中央棟の跡地には「小柳之湯」を復活させました。
- ・東西に分けたホテルは、全く異なるコンセプトとし、旧小柳が重要視していた「幅広い客層へ対応」することを引き継ぎました。また、各棟のランドレベルにはブックストア、セレクトショップ、ベーカリー、カフェダイニングを設け、日帰り利用も可能な外部に開かれた施設にしました。
- ・「小柳」敷地内に3箇所の入り口を設けました。さらに温泉街を回遊してもらうため、敷地外の空き家、空きスペースをカフェ&レセプションに。長く使われていなかった長屋は「哲学と甘いもの」というカフェに生まれ変わりました。地域の共同浴場である「睦の湯」では、使われてなかったスペースを借りて、浴場の機能はそのままに、カフェ兼ホテルのレセプション「おやきと、コーヒー」として整備しました。



1. 松本本箱



2. 小柳



3. 小柳之湯



4. 浅間温泉商店



5. ALPS BAKERY



6. 哲学と甘いもの



7. おやきと、コーヒー



a. 湯坂



b. 山手通り



c. 中央通り



## 賑わいの起点として「道（通り）」と施設の関係性のデザインする

・「小柳」は山の手通りと湯坂の交差する浅間温泉の中心に建っています。山の手通りは室町時代から栄えたかつてのメインストリートで、温泉の源泉もこの道沿いに湧いています。湯坂は明治期以降に栄えた通りで、かつて路面電車が走っていた頃の終点駅から温泉街を結ぶ中央通りと接続しています。「おやきと、コーヒー」はその終点駅の目の前、中央通りにあり、そこでチェックインを済ませ、中央通り、湯坂を歩くとホテルに到着します。さらに湯坂を登ると「哲学と甘いもの」があります。つまり今回の計画のねらいは、道（通り）が賑わいの起点の役割を果たすよう、施設との関係性をあらためてデザインし、浅間温泉の賑わいを取り戻すことにもあります。

・「おやきと、コーヒー」「哲学と甘いもの」は、今後、地元の若手経営者が浅間温泉に新規出店する「呼び水」と考えています。空き家をリノベーションして、歴史と文化を再構築・表現する楽しさを知ってもらい、松本市内でも活力ある街として市民に認識してもらえるようにしていきたいと考えています。そして実際、「おやきと、コーヒー」の目の前に地元経営者によるベーカリーが昨夏、開業しました。一部の方々は当社のベーカリーとの競争を心配してくれていますが、当社では「ベーカリー巡りの街・浅間温泉」として、さらなる脚光を浴びるのではないかと、期待をしています。



明治30年頃の山の手通りの様子。左に見えるのが小柳。



松本駅から走る路面電車「松本電鉄浅間線 浅間温泉駅」  
出典) <https://www.omotetsu.com/shimada/matsuden/index.htm>

## 社外クリエイターとの協業

本計画は自遊人クリエイティブチームで、マスタープラン、各施設のクリエイティブディレクションを行なったプロジェクトです。さらに自社の設計チームで一部施設の設計を行い、グッズ、浴衣、アメニティー、全施設の家具の選定とディレクションとデザイン等も行なっています。一方で地域や施設の個性を引き出してくれるであろう現在の日本を代表するクリエイターに声をかけ、参加してもらったのも特徴です。声がけの基準は「自身でも実業を行なっているか?」「それに準ずる活動をしているか?」。これからのクリエイターは、自身の創作活動を極めるだけでなく、より社会活動、経済活動と密接につながっていかねばならないと感じています。特に建築家やデザイナーはその重要性が高く、単に自身の考える提案性だけでなく、実際にその施設が持続可能な経営を成立させることができるのか、深く考察する必要があります。今回参加したクリエイターはそういった点で「現在の日本を代表する」方々ばかり。小柳の再生だけでなく、持続可能な温泉街、持続可能な地方都市をテーマに、様々な形で“まちづくり”に関わって頂きました。結果、多種多様な顔を持つ、街そのもののようなプロジェクトになったのではないかと感じています。

## [建築設計・デザイン概要]

### [1] ブックホテル「松本本箱」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1 設計：SUPPOSE DESIGN OFFICE

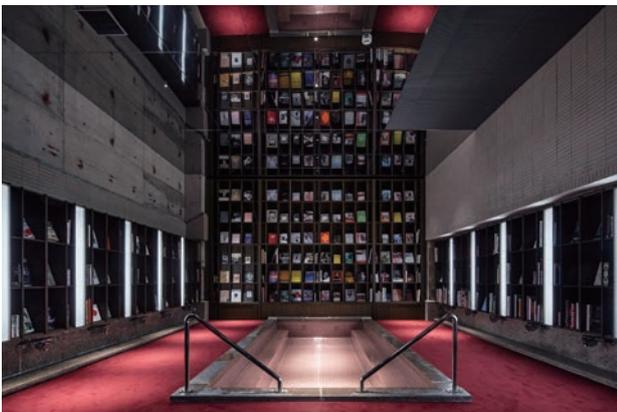
規模：地上 6 階 延床面積：2336.36㎡ 構造：RC 造

用途：ホテル、ブックストア、ダイニング

「松本本箱」は書店やレストランを併設し、インナーバルコニーを作った全室露天風呂付き 24 室のホテルとして旅館の歴史を引き継ぐような意匠で計画しています。

パブリックスペースでは、本棚を主体とした空間を作ることによって本と人の居場所の境界をなくし、宿泊施設と書店という異なる要素が心地よく同居する関係性を考えました。計画の中で旅館の記憶として残したのは昭和旅館の赤絨毯の印象。低く抑えた朱色の軒と縁側を新たに設ける事でコンクリート造の旅館に足りなかったしっとりとした色気と本を読み寛ぐための居場所を作っています。また、解体で出る廃材を材料として障子枠で製作した行燈照明、使われなくなった浴槽や洗い場を活かした空間を作るなど、アップサイクルという思考で価値を失ったものに新たな用途を与え価値とすることで、このプロジェクトの本質でもある再生と循環という視点を感じられる場を目指しました。

SUPPOSE DESIGN OFFICE 吉田愛



撮影：長谷川健太

## [2] 温泉ホテル「小柳」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1 設計：株式会社自遊人、Y 建築設計  
規模：地上 7 階 床面積：1342.09㎡ 構造：S 造 用途：ホテル

敷地東側の建物は、1686 年創業の「小柳」の歴史を繋ぐ宿泊施設としてデザインしています。江戸時代、「小柳」の敷地内には下級武士に開放した「小柳之湯」があったこと、そして近年では「小柳」が長野県民の憧れの宿であり、多種多様な客層を迎え入れてきたことから、客層を絞る「松本本箱」とは全く違ったコンセプトとしました。すなわち、「全ての人々に優しい宿を」。全室に掛け流しの露天風呂を設けるだけでなく、開かれた施設として多様な宿泊層を迎え入れるべく、バリアフリー対応、ファミリーにも適した内装を念頭に、鉄骨造のスケルトンに戻した上、丁寧に素材を選定して仕上げました。テーブルやカウンターなどの木材は基本的に全て無垢材。壁は珪藻土を採用したほか、基本的に自然素材で構成しています。

また全ての部屋に手摺を設置しているだけでなく、一部客室にはバリアフリー対応モジュールのトイレを設け、露天風呂へのアプローチも引き戸+直線にすることで車椅子の方も安心して宿泊できるようになっています。ユニバーサル 2 ベッドルームでは入浴用のリフトも設けています。

そのほか、姉妹館の「里山十帖」「箱根本箱」「講 大津百町」と同様、「体感するリアルメディア」として、「小柳」には内外の名作椅子を配置。その座り心地を体感できるようになっています。

株式会社 自遊人 クリエイティブチーム



撮影：長谷川健太

### [3] 湯小屋「小柳之湯」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1 設計：スキーマ建築計画、Y 建築設計  
延床面積：37.74㎡ 構造：木造 用途：共同浴場（宿泊者限定）

正門入り口、入ってすぐのところに源泉掛け流しの小さな露天風呂を計画した。この地域には古くから住民のための共同風呂がある。しかし住民の高齢化に伴い支えにくくなっており、新たな管理維持の方法を見出す必要性が問われている。そこで一つの提案として、外に開かれた風呂としての「小柳之湯」を設計した。共同風呂のコンパクトでシンプルな浴場スタイルを咀嚼しようと考えた。ただ、共同風呂を目指しながらも、自遊人さんからの「江戸時代の小柳之湯を彷彿させる浴場にしたい」という強い要望で露天風呂にしないとならず、できるだけ近隣からの視線を外しながら外気を取り込めるよう配置などを計画した。そして、仕上げとしては、もし各所にある共同風呂が温泉街に開かれた時、共通の印象を作るべく素材の選定は吟味した。屋根を湯気抜きのある銅ぶきにし、外壁を檜で構成し、扉をその檜と親和性のある FRP のクリアにした。

スキーマ建築計画 長坂常



撮影：長谷川健太

#### [4] ショップ「浅間温泉商店」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1（ホテル小柳内） 設計：スキーマ建築計画 延床面積：204㎡  
構造：S造 用途：ショップ

「ホテル内のお土産屋ではなく、松本で一際目だった生活雑貨店として位置付けたい」という自遊人さんの希望から、街からくるお客さんが楽しめるお店をイメージして計画した。「まずはこの温泉街が松本市内のお客さんに見直されるように」という希望だったが、それには、松本らしいというよりも、松本にはなかった新しいテイストが必要だと感じた。

この温泉街には、一見廃墟に見えながらも東京など都市の中心地にはない味わい深い建物が多くあり、きっと、この先、そこに魅力を感じた若者の手で築かれ生まれ変わっていく。その時、そこにある素材を最大限に利用したリノベーションらしいデザインが求められる。そんな街作りの一つの口火をきれたらと考え、元々既存のホテルの料亭として使われていた和風木造インフィルを間引くだけでお店のデザインの骨格を作りたいと考えた。そして間引くことで、RCのハードなスケルトン部との強いコントラストが生まれ、お店の個性ある表情を作ろうとした。

スキーマ建築計画 長坂常



撮影：長谷川健太

## [5] ダイニング「ALPS TABLE」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-13-1（ホテル小柳内） 設計：ノングリッド / デザインムジカ  
延床面積：174㎡ 用途：ダイニング

「ALPS TABLE」は、松本十帖の「小柳」1階につくられた、絵本やインタラクティブな遊びスペースがある、子どもから大人までが楽しく食事ができるファミリーダイニングです。建物の歴史を残しながらスタイリッシュに生まれ変わった「松本本箱」や「小柳」から一変し、大自然からの恩恵を感じる旬の食材をふんだんに取り入れた美味しく楽しいレストランとして、まるで絵本の中に入り込んだような独創的な空間となるようデザインしました。

エレベーターの扉が開くと、目の前の壁一面に北アルプスの山々の絵画が連なります。絵画は山や動物の絵に定評がある美術作家の佐々木愛さんに描いていただきました。山の稜線をたどりながら部屋の中へ進むと、足下に川が流れ、魚が泳ぐプロジェクションが床を輝かせます。実り豊かな里山の森の絵画の中には動物もちらほら顔を覗かせています。山や森の絵画を製作するにあたり、松本十帖の裏手にある山に地元の登山家の方と出向き、そこでみつけた木や花、よく見かける動物たちをリサーチして描いてもらいました。「ALPS TABLE」のメインコンテンツは、大きな壁に映した里山絵画のプロジェクションです。ここでは、お米とりんごを育てるインタラクティブゲームで遊ぶことができます。豊かな松本の自然と、そこで育てられている農作物のことを、食べて、見て、遊んで学べるレストランとなっています。また、段々畑をイメージした本棚では腰をかけながら親子で絵本を読むことができ、子供の好みに合わせて、フィジカルな遊びだけでなく多様な場を用意しました。部屋の床やテーブル、カウンターには天然の無垢材を使用し、温もりある素材を選びました。客席は家族単位で座れるベンチシートや座敷席とし、赤ちゃんや小さな子供と一緒にゆったり食事を楽しむことができるよう配慮しています。

ノングリッド 小池博史 / デザインムジカ 安藤僚子



撮影：岩佐十良 / 左下撮影 NON GRID INC.

## [6] カフェ「哲学と甘いもの」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-12 設計：スキーマ建築計画  
延床面積：75.36㎡ 構造：木造 用途：カフェ・ブックストア

今回の街に開くホテルの計画で実際に外に一步踏み出したお店がレセプションとして利用されている建物が西に降りたところにあるが、その第二弾としてこのカフェが誕生した。ここは門を出て東に1～2分登る少し小高いところがあり、すでに地域住民の憩いの場になっている。毎日訪れる90歳を越えるおじいちゃん、市街から訪れる学生等々。改修するにあたって、工事前からすでに懐かしい民家の佇まいを持っていて我々はその趣を崩さず、必要最低限に手を入れることでカフェに変えた。その中でも特徴的なのはインフィルをほぼ剥がし、床までも剥がし締め固めたむき出しになった空間だ。そこに家具などで客席を並べた。棚は壁から少し離れた位置に配置し、その裏に席を設けてお客さんがこもって本が読めるような場所を作った。

スキーマ建築計画 長坂常



撮影：長谷川健太

## [7] レセプション&カフェ「おやきと、コーヒー」

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-15-17 設計：株式会社 自遊人  
延床面積：108.56㎡ 構造：木造 用途：ホテルレセプション・カフェ

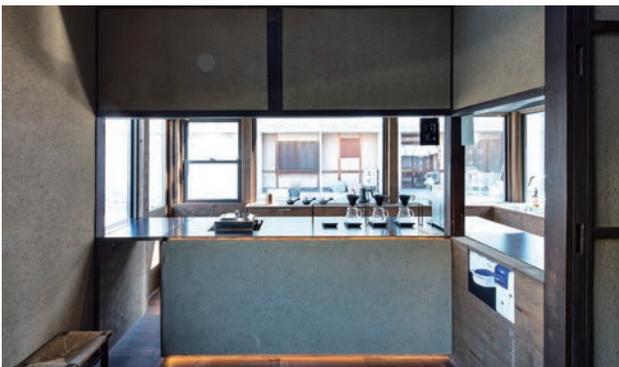
旧「小柳」は地域を代表する旅館でしたが、浅間温泉はその深い歴史ゆえ、道も細く、駐車場用地も少なかったのが現実です。旧小柳も近年、敷地内に駐車場がないことが最大の問題で、お客様からのクレームもその点に集中していました。そこでコンセプト立案の時点からこのデメリットを武器に変えることを考え、レセプションを温泉街のどこか別の場所に作ることにしました。それによって宿泊客だけでなく、多くの人々が「温泉街を回遊する」イメージもまとまりました。

レセプション候補は複数箇所ありましたが、最終的に選んだのが昭和時代から地域住民に親しまれた共同浴場「睦の湯」。浅間温泉の共同浴場は、ほぼ全て湯仲間により運営されている一般入浴不可の共同浴場で、外には開かれていないのが実情ですが、「睦の湯」の方々の松本十帖への深い理解によって、未使用部分の賃貸を認めてもらえることになったのです。未使用部分とは、昭和初期から中頃にかけて芸者さんの稽古場だった2階と、管理人休憩所のスペース。最終的には「睦の湯」の正面玄関も貸していただけることになりました。

設計にあたり、もっとも苦慮したのが住民の生活の一部である「入浴」という行為を、空間的にも心理的にも守ること。そこで共同湯の玄関を正面左側に新設すると同時に、一方では正面玄関を入った先に現れる男湯・女湯の扉を残しつつ、裏側から防音を徹底し、また脱衣室での様子が透けないように工夫しています。

建物の老朽化にどのように対処するのかも重要なテーマでした。外壁は一部サイディング、内部はクロスが貼られた上、そうした劣化が進んでいたのですが、芸者さんの稽古場だったことをうかがわせる「艶」が感じられたのも事実。この「艶」をどのように再現するかも重要なポイントでした。サイディングとクロス、内装材を剥がして出てきたのは歴史を感じる土壁。この土壁を生かし、さらに湯小屋との界壁には新たに安曇野の左官業者による土壁を施工しました。左官業者によると、既存部分は浅間温泉の土の色、新たな土壁は梓川対岸の安曇野の土の色だそうで、その天然の色の対比を楽しんでいただくこともできます。

株式会社 自遊人 クリエイティブチーム



撮影：長谷川健太

## [8] 信州発酵研究所

所在地：長野県松本市浅間温泉 3-611 設計：SUPPOSE DESIGN OFFICE  
延床面積：77.42㎡ 構造：木造 用途：シードル醸造

土壁の蔵をシードルの醸造所＝製造工場として利用するにあたり、SUPPOSE DESIGN OFFICE に照明計画を含む内外観のメインパスを提案頂き、それを元に保健所と協議を行う中で諸室の配置、内装仕上げを決定していった。蔵の既存状態そのままを大切にしたいが、基本的には製造行為を行う場所のため土壁は新しい壁・天井で覆う必要があった。そのため製造室は壁を一部ガラス張りにすることで土壁を印象的に切り取り、間接照明を仕込み、松本本箱の本の道から庭と製造機越しに土壁を覗けるようにした。一方でタンク内で発酵させる工程のみ内装の制約がないため、発酵室は土壁、躯体を全面的に表しにし、発酵中のタンクが古い蔵に並ぶディスプレイを兼ねたスペースとした。蔵の出入口の建具は框を出来るだけ見せない納まりでガラス戸に更新し、開口条件にも制約が大きい蔵に対してオープンな構えとした。たとえ工場であっても古いもの、既存のものを大切にしたいという思いを訪れた方に感じて頂ける空間、見せ方を目指した。

株式会社 自遊人 クリエイティブチーム



撮影：岩佐十良 / 望月葉子

## [9] 松本十帖ロゴデザイン&サイン計画

デザイン：artless Inc.

「松本十帖」のロゴデザインは、松本をイメージした松の家紋と、毛筆と上質感のある書体を組み合わせデザインしております。松本十帖の象徴となる松の家紋は、紋章上絵師の波戸場承龍さんと artless が共作で制作し、全て円で構成された伝統的な手法で描いたものとなります。また、サインやステーションナリーデザインで使用する、矢印やアイコンデザインは、書体のディテールからインスパイアを受けた形でデザインしております。ブランドカラーには、松本の景観や、建築の MATERIAL から連想される「利休鼠」「生成」「石版」「真鍮」など日本の伝統色を選定し、和の落ち着きと上質な佇まいを表現しています。松本の文化と風土を生かし、ロゴ、書体、サイン、グラフィック、web、アメニティまで、デザインを行っています。

artless Inc. 川上シュン

## [MEMBERS]

### SUPPOSE DESIGN OFFICE 谷尻誠 吉田愛

#### □ 松本本箱の設計

2018年の春よりスタートした浅間温泉の老舗旅館「小柳」の再生計画では、創業300年を超える湯と町の面影を残しつつ“本”を中心とした複合文化施設としての新たな旅館の在り方について考えました。かつての木造の温泉街は、時代を経てコンクリート造の建物が連なる昭和の旅館街へと変化し、昔ながらの共同浴場の存在やコミュニティも希薄になりつつあった。そんななか三つの建築で密に構成されていた旅館の中央棟を解体して町とのつながりを取り戻し、同時に昭和の温泉宿特有の時代感や匂いを消し去るのではなく、いかにチャームングに活かすのかを考える事で「過去と未来が交差する場」を設計をしています。躯体の上に仕上げられた厚化粧を剥がし、現れたダイナミックな既存躯体を手掛かりに、元々あった大宴会場や大浴場をレストランやライブラリー空間として活用。あえて昭和の温泉旅館の記憶を残すことによって新築では起こらない状況「大宴会場+本」や「浴場+本」という違和感のある個性的な風景と体験をつくりだしました。それらがこのエリアの新しい魅力かつ拠点となり街に良きサイクルと関係性をつくるきっかけとなるよう計画しました。(SUPPOSE DESIGN OFFICE 吉田愛)

#### < SUPPOSE DESIGN OFFICE >

谷尻誠、吉田愛率いる建築設計事務所 SUPPOSE DESIGN OFFICE。2000年設立。2014年より吉田愛と共同主宰。広島・東京の2ヵ所を拠点とし、住宅、商業空間、会場構成、ランドスケープ、プロダクト、インスタレーションなど、国内外で幅広い分野のプロジェクトを多数手がける。最近では、東京事務所併設の「社食堂」、「BIRD BATH & KIOSK」「絶景不動産」「21世紀工務店」を開業するなど活動の幅も広がっている。作品集に「SUPPOSE DESIGN OFFICE -Building in a Social Context」(FRAME社)がある。



#### スキーマ建築計画

#### □ 浅間温泉商店、小柳之湯、哲学と甘いものの設計、外構のデザイン監修

松本の浅間温泉を「松本十帖」という複合施設を作りながらエリアリノベーションを行おうとしている自遊人さんのお手伝いをさせていただいた。本計画は温泉もレストランもショップも宿泊施設も全て囲い込みがちなリゾートホテルのスタイルから脱却し、街に開き、街と共生する新しい宿泊施設のあり方を自遊人さんが目指した。でも、その開く姿勢はただ自遊人さんが勝手に打ち立てているというよりもこの浅間という街全体が高齢化などに伴い個々に閉じているだけでは衰退の一途を辿るという状況を見据え、今互いに開き手を繋ぐことで松本からも近いこの好立地を生かし再生可能と考えたのだ。そして、その時、サポーズデザインさんが本来のホテルの骨格を築くなら、我々はどちらかというとその開く側の役割を担わせていただいた。(スキーマ建築計画 長坂常)

#### < 長坂常 >

スキーマ建築計画代表。1998年東京藝術大学卒業後にスタジオを立ち上げ、現在は北参道にオフィスを構える。家具から建築、そして町づくりまでスケールも様々、そしてジャンルも幅広く、住宅からカフェ、ショップ、ホテル、銭湯などなどを手掛ける。どのサイズにおいても1/1を意識し、素材から探求し設計を行い、国内外で活動の場を広げる。日常にあるもの、既存の環境のなかから新しい視点や価値観を見出し「引き算」「誤用」「知の更新」「見えない開発」「半建築」など独特な考え方を提示し、独自の建築家像を打ち立てる。



写真：Yuriko Takagi

## ノングリッド / デザインムジカ

□ アルプステーブル 企画・開発・設計

歴史ある浅間温泉を「智と感性」をテーマに蘇らせる未来のためのプロジェクトに私たちは先端的なインタラクティブコンテンツを提案してほしいという要望をいただきました。インタラクティブコンテンツはエンターテインメント性が高いだけに飽きやすく、かつプロジェクターなど機材に依存され陳腐化しやすい性質を持っています。

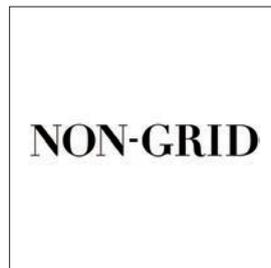
そこでイラストレーションとアニメーションを融合させ映像だけに依存しない空間を考察し、また、ファミリーが利用するレストランということで、北アルプスの麓にある松本の素晴らしい自然環境からの恵みを存分に味わえ、地元の食材をテーマにしたインタラクティブな食育コンテンツで学び遊べる体験型レストランをデザインしました。「自然」と「食」をテーマに、イラストとプロジェクションを融合させた絵本の中に入り込んだような空間は自然からの恩恵を十分に五感で感じることでしょう。

今回の絵本の世界に入り込むような世界観とビュッフェレストランとしての機能性をデザインしてくれたデザインムジカの安藤僚子さん。自然の偉大さ優しさを表現してくれた美術作家の佐々木愛さん。先端技術を安定感持って開発した技術スタッフたち。このプロジェクトに関わる全てのひとが未来の子どもたちへの愛情いっぱいに取り組んだプロジェクトです。(ノングリッド 小池博史 / デザインムジカ 安藤僚子)

<ノングリッド>

ノングリッドは真剣さと遊び心を持ちながらコトやモノを自ら創出し、デザインを通して人と社会を結ぶプラットフォーム作りに取り組んでいます。2000年の創立以来、ビジュアルデザインで評価されてきました。そして、2013年にはクリエイターマネジメントを、2014年からは Why Juice? などの自社ブランド事業をスタート。

20年の活動から得られた経験と知見をベースに、クリエイターや自社ブランドと互いの可能性を引き出し合いながら、社会への接点と貢献を常に意識したプラットフォームを構築しています。クライアントの先にあるお客様へ届くクリエイションを提供できることが私たちのプラットフォームの強みです。



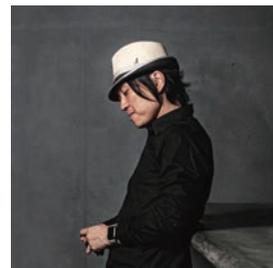
artless Inc.

□ 松本十帖の館内サイン、ロゴデザイン (松本十帖・ホテル小柳・レストラン三六七)

松本／浅間温泉に新しい時代の風と文化をつくるというイメージで、はじまりの構想段階から松本十帖のロゴをはじめグラフィック、サイネージ、ユニホーム、レセプションカフェのコラボレーションなど包括的なブランドデザインを担当させていただきました。浅間温泉の持つ歴史とこれからの未来を掛け合わせるようなブランドとして、新しい風と流れを生み出す存在になることを願い、今後も並走していきたいと考えています。(artless Inc. 代表 川上シュン)

<川上シュン>

ブランディング・エージェンシー artless Inc. 代表。独学でデザインとアートを学び、現在、東京と海外を行き来しながら、アート／デザイン／ビジネス、そして、グローバル／ローカル と多角的視点を軸としたグラフィックデザインから建築まで包括的なブランディングをグローバルに行っている。また、アーティストとしての活動も行っており、「日本独自の美的理念」へ回帰しながらも「アートとデザイン」そして「東洋と西洋」を融合的に捉え、独自の視点と価値観でのグラフィックアートやインスタレーション作品の制作と発表も行う。



## WELCOME GROUP

### □ 浅間温泉商店 ディレクション

自遊人が考える、「その地に根づき、魅力を発信していきたい」という想い。そのことにウェルカムとしてとても共感し、地域とつながりながらその街の魅力を発信・伝えていけるような「新しいプラットフォーム」となれるようにと、TODAY'S SPECIAL のチームとともにお店作りをお手伝いさせていただきました。ここからさらに、いろいろなことがつながり広がっていくことを楽しみにしています。(ウェルカムグループ 代表 横川正紀)

<横川正紀>

ウェルカムグループ代表。1972年東京生まれ。京都精華大学美術学部建築学科卒業後、2000年に(株)ウェルカム(旧社名(株)ジョージズファニチュア)を設立、DEAN & DELUCA や CIBONE など食とデザインの2つの軸で良質なライフスタイルを提案するブランドを多数展開。その経験を活かし、商業施設やホテルのプロデュース、官民を超えた街づくりや地域活性のコミュニティづくりへと活動の幅を拡げている。武蔵野美術大学非常勤講師。



## BACH

### □ 松本本箱「げんせん本箱」の選書

松本十帖の本の一部を選書・配架している幅です。今回は初めて、日販の選書チームと協力しながら本棚を編集しました。コロナ禍において、特に紙の本の存在意義は変化したと思います。流れ続ける SNS と違い、責任の所在がはっきりした情報として。映像のサブスクリプションチャンネルと違い、一文に立ち止まり、読み戻り、コンテンツに向かって時間を自身でコントロールできる相棒として。世界には、読まなくてはいけない本など無いかもかもしれませんが、ここで何かに出くわしてもらえれば嬉しい限りです。(有限会社 BACH 代表 ブックディレクター 幅允孝)

<幅 允孝>

人と本の距離を縮めるため、公共図書館や病院、動物園、学校、ホテル、オフィスなど様々な場所でライブラリーの制作をしている。最近の仕事として札幌市図書・情報館の立ち上げや、ロンドン、サンパウロ、ロサンゼルス の JAPAN HOUSE など。2020年7月に開館した安藤忠雄建築の「こども本の森中之島」ではクリエイティブ・ディレクションを担当。近年は本をリソースにした企画・編集の仕事も多く手掛ける。早稲田大学文化構想学部、愛知県立芸術大学デザイン学部非常勤講師。



## 株式会社 ひらく

### □ 松本本箱 の選書

豊かな自然環境と独自の文化を持つ松本。そして、歴史ある温泉地・浅間温泉。その土地で、松本十帖は街にひらいたメディアとして開業する。そこで本ができることはなんだろう? 「街を往来する人が交差する本屋をつくること」と「宿泊者がじっくり読める本が置くこと」。「買う」と「読む」の異なるモチベーションを両立する。そのヒントは「日常と非日常」「こどもとオトナ」などのグラデーションを行き来することでした。ぐるりとめぐって、いまの気分合う一冊を見つけてみてくださいね。(株式会社ひらく 代表取締役 染谷拓郎)

<染谷拓郎>

1987年、茨城県生まれ。2009年日本出版販売入社、2015年より現職。株式会社 ASHIKARI 取締役。主な実績として、「箱根本箱」の立ち上げ、キャンペーン「森の生活」開催、イオンモール上尾「Park of Tables」プロデュースなど。吉野川市立鴨島図書館のアートディレクション、選書企画「BPM Reading」開発など、図書館向けの企画も多く担当。



## 株式会社 不破稔事務所

□ 松本本箱・哲学と甘いもののロゴデザイン他

自遊人とは「松本十帖・松本本箱」以前より、「箱根本箱」のロゴや V.I.、コミュニケーションツールデザインからお手伝いさせて頂いていました。松本本箱のプロジェクトは箱根本箱の延長という命題を基にロゴは統一させました。箱根・松本本箱のロゴタイプは本の判型である白銀比を用いたためのプロポーションで構成し、本のページが捲れる様子をディティールに持たせて強いキャラクターを作りました。ロゴマークは五感＝五環として本棚と松本本箱のイニシャル MH の要素で表現しています。コミュニケーションツールやオリジナルグッズは、「本好きがピンとくるデザイン」を心がけて箱根・松本本箱のファンを増やすことを目指しています。「哲学と甘いもの」のロゴタイプは、正方形と黄金比を用いて数理的に構成されたオブジェクトを幾何学的にランダム配列して必然性と蓋然性を表現。ルビのように見えるアリで甘いものの存在を暗示しています。アルプスペーカーリーのスタンプカードは、北アルプスの登山ルートをリスの足跡スタンプで辿るデザインアイデアを提案しました。ここにしかない、わくわくするコミュニケーションを目指しています。(不破稔)

<株式会社不破稔事務所代表 アートディレクター 不破稔>

企業それぞれのミッションやビジョンを分析し、ありたい姿に向けて、C.I./V.I./B.I. の開発、広告・販促計画、グラフィック、WEB など、コミュニケーションデザインの企画と制作を手がける。小田急電鉄株式会社「HELLO NEW ODAKYU!!」広告キャンペーンや、「スター・マイカ・ホールディングス株式会社」の C.I./V.I. 開発、「株式会社藤崎惣兵衛商店・長瀬蔵」の C.I./V.I./B.I. 開発を手掛ける。「商店街 HOTEL 講 大津百町」「箱根本箱」「松本本箱」「哲学と甘いもの」のロゴ・V.I. の開発、グラフィックツール制作を担当した。

## 株式会社 自遊人

1989 年、武蔵野美術大学に在学する 5 人の学生が始めたクリエイティブ・カンパニー。当初はデザイン事務所として活動、1990 年からは雑誌編集を手掛けるようになり、2000 年には雑誌「自遊人」を創刊。「あらゆるものをメディアに」をテーマに、2002 年には食品の製造販売をスタート(株式会社自遊人の暮らし)。2004 年には東京・日本橋 から新潟・南魚沼に移転。2012 年に南魚沼市大沢山温泉の旅館を買い取り、2 年間のリノベーションを経て 2014 年に「里山十帖」としてオープンさせた。その後は宿泊施設や飲食店のリノベーション & プロデュースを積極的に行い、2017 年に「山形座 瀧波」、2018 年に「箱根本箱」「講 大津百町」をディレクション、2020 年に「松本十帖」をオープンさせた。「地域の食」をプロデュースすることにも積極的で、「A 級グルメ」「ローカルガストロノミー」などの言葉を作るのと同時に新しい食の価値観を世の中に提言。「里山十帖」は 2020 年に発刊された「ミシュランガイド 新潟 2020 特別版」で一つ星とレッドパピリオンを獲得した。

<クリエイティブディレクター 岩佐十良>

1967 年東京都生まれ。武蔵野美術大学在学中の 1989 年にデザイン会社を創業し、のちに編集者に転身。2000 年、雑誌『自遊人』を創刊。2004 年、拠点を東京から新潟・南魚沼に移転。2014 年、新潟県大沢山温泉にオープンした「里山十帖」では、空間から食まですべてをディレクション。グッドデザイン賞 BEST100 に選出される。2018 年に宿泊施設、「商店街 HOTEL 講 大津百町」(滋賀県大津市)、「箱根本箱」(神奈川県箱根町)を開業。多摩美術大学客員教授。「松本十帖」開業までの様子は NHK の『プロフェSSIONナル 仕事の流儀』で放送された。



[取材並びに本件に関するお問い合わせ]

株式会社自遊人 小沼 百合香・吉澤 早苗 info@matsumotojujo.com TEL : 0570-001-810